# 「小田原」のルーツを知りたい

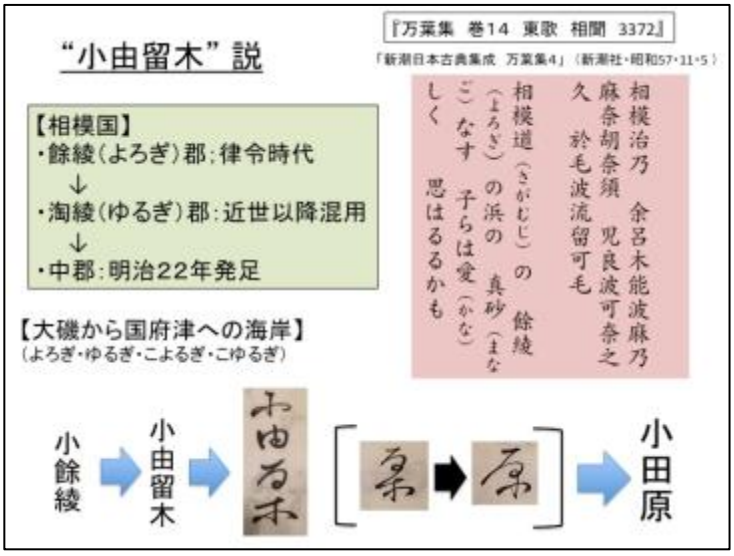
仮説：“をたわら宿”から「小田原宿」へ

小田原史談会
宮 原 諄 二

## 起

【これまで知っていた話】
“小田原”との地名の初見は1300年頃に書かれた称名寺文書（金沢文庫蔵）中の“をたわら” であり、そして古来より知られていたこの地域の通称「小由留木」の草書体を“小田原”と読み、定着したと言う「小由留木説」が知れ渡っています。

【私の疑問】
「小由留木」説は本当なのか。漢字で表現されるよりもずっと前から、地元の人たちはこの地域を “をたわら”と呼んでいたはずです。 では、いつ頃から、なぜ “をたわら”は「小田原」になったのか。




## 承1　調査　その1

【全国の“小田原”地名調査】
現在でも小田原との地名は全国各地にあり、地名の由来はほとんどすべて地形から来ていました。また奈良県における実地調査で見られるように、“小田原”は小字としても古くから全国に普遍的にあったと思われる地名です。私たちの「小田原」の由来を、小由留木説としている地名関連の辞典・辞書等はありませんでした。

【小由留木説のそもそもは？】
『新編相模国風土記稿』（1841）の足柄下郡　早川庄の「小田原城」の項に、“門川村（現湯河原町）の村民の蔵にあった古記に小由留木説が書かれているとの記述が「小由留木説」の初見と思われます。また江戸幕府の昌平黌の担当者は“小田原”との地名は『相模国古風土記残本』に書かれてあったと触れていますが、信用できないも述べています。

### 「新編相模國風土記稿」

【小田原城】の項：　巻之二十三 村里部 足柄下郡　巻之二 早川庄

『 ・・・・・、門川村民蔵所の古記に見ゆ、按ずるに、今も淘綾（ゆるぎ）郡より此地の海濱を、すべて小餘綾（こよろぎ）磯と呼り、 小田原の唱も、小由留木の文字を、艸躰（そうたい）に連書せしを、謬（あやま）りしより起これりと云説あり、 されど相模國古風土記残本に、小田原の地名見えたれば、和銅以前の事ならん、もつとも信用すべからず、・・・・』

【小田原宿上】の項：巻之二十四 村里部 足柄下郡　巻之三 早川庄

『・・・・・、當国風土記残本に、小田原の地名見ゆ、曰、小田原、公穀五百七十二束字田、假粟三百二十七丸三毛田、貢栢（かしわ）樟（くす）楊（やなぎ）梅（うめ）梨（なし）梅桃（ゆすらうめ）等、諸海河之鮮魚等、又曰、相模国、南限小田原、・・・・・ 』

（注）「古風土記残本」とは：　飛鳥・奈良時代の元明天皇(在位慶雲4年661-和銅8年715）の詔により、各律令国の国庁が編纂した地誌。写本として「出雲国風土記」・「播磨国風土記」・「肥前国風土記」・「常陸国風土記」・「豊後国風土記」の5つが現存。出雲国を除き他は一部欠落。

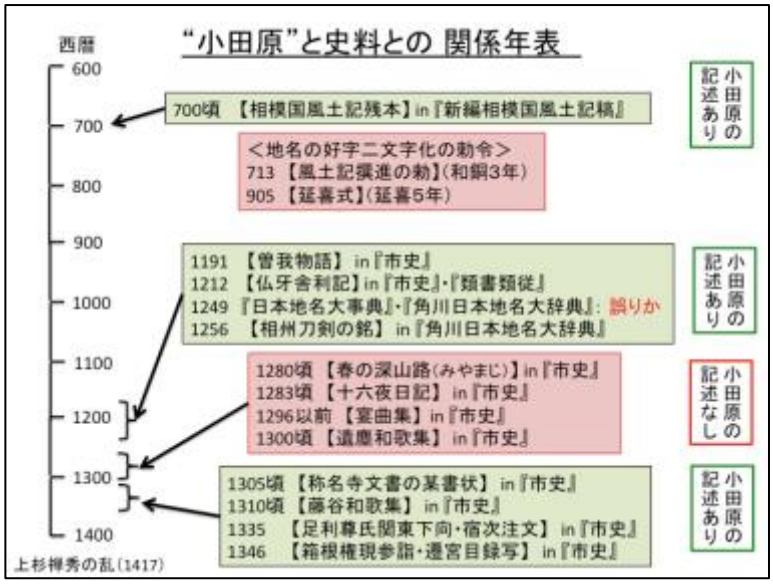
【私の推測1】
・ 和銅の頃の『相模国風土記』は現存していないので確認できませんが、『風土記撰進の勅』（和銅3年713）に定められた地名の“好字二文字化” に従って書かれています。その後の『和名類聚抄』（平安中期931-936）によれば、地名は二文字に徹底され、全国3330の郷名の1・3・4字地名は全体の約1%にすぎなくなったようです。もしも3文字の「小田原」との地名が存在していたら、“好字二文字化”の影響を受けていたでしょう。もっとも「郷」のレベルではないので、『和名類聚抄』に書かれている可能性はありません。

【私の推測2】
・“小田原”の地名の由来は、「小」・「田」・「原」等の漢字が関連する地形から “をたわら”と呼ばれてきたと考えた方が真実に近いでしょう。「小由留木説」は、江戸時代かそれ以前に、学のある者が唱えた歴史に残る“名ジョーク”であろうと思っています。　　では、小田原のルーツはどうなのか、さらに知りたくなりました。

## 承2　調査　その2

【“小田原”が出てくる史料の再調査】
“小田原”との名が出てくる史料を年代順に並べると、現存していない『古相模国風土記残本』を除き、1191年（曽我物語）、1212年（仏牙舎利記）、1256年（相州刀剣銘）と続いたあと“小田原”との地名が現れなくなる中断期があり、1305年（称名寺文書）以降にまた頻繁に出てくるパターンが見られます。ただし通説では「曽我物語」や「仏牙舎利記」の書かれた時代は南北朝時代であって、年代は信用できないとされています。

【私の推測3】
ギリシャのホメロスの詩がH.シュリーマンのトロイの発掘により真実とわかったように、「曽我物語」や「仏牙舎利記」の中の年代の記述が正しいとしたら、13世紀初めには“をたわら”の地に“宿”が存在していたことになります。その仮称“をたわら宿”はその後衰退かあるいは消滅するとの変遷を経て、13世紀後半に復活し「小田原宿」となって発展していったとの推理が成り立ちます。　この推測を支持する何らかの事実はあるのだろうか、知りたくなりました。




## 「十六夜日記」

原文：国会図書館デジタルコレクションより

藤原為家の側室・阿仏尼（？-1283）によって記された紀行文日記（弘安6年1283頃成立か。訴訟のため1277-1278年（or 1279-1280年）にかけて鎌倉に下る。当時60歳ほど。

【10月27日】：（興津の宿を出て）、“明けはなれて後、富士川を渡る。・・・・・・、伊豆の國府（こう, 三島）といふ處にとどまる。・・・・・・・・。”

↓

【10月28日】：“伊豆の國府を出でて、箱根路にかかる、まだ夜深かりければ、・・・・足柄山は道遠しとて箱根路にかかるなりけり。”

↓

“・・・・、いと嶮（さか）しき山を下る。・・・・・湯坂とぞいふなる。・・・・麓に早川といふ川あり。・・・・・、湯坂より浦に出でて日暮れかゝるに、猶とどまるべき所遠し。”

↓

“伊豆の大島まで見渡さるゝ海づらを、いづこかといふと問へば、知りたる人もなし、海人の家のみぞある。”

↓

“鞠子川という川を、いと暗くたどり渡る。今宵は酒匂といふ處にとどまる。明日は鎌倉に入るべしとなり。”

【10月29日】：“酒匂を出でて、浜路をはるばると行く。・・・・・・。”

この20年後にはこのあたりは“をたわら”として知られているようになるのだが、早川と酒匂川の間の浜（御幸の浜）で出会った地元の漁師（？）は地名を言えなかった。　なぜ？　京都の才女と相模の粗野な漁師では、話す言葉そのものが通じなかったのではないか？　宿場がなかったことは確かであろう。

## 転　調査　その3

【松原大明神】
鎌倉時代後半の「小田原宿は現在の松原神社付近にあったと比定されています。松原神社は、明治以前は「松原大明神」と呼ばれていて、「小田原宿」の総鎮守でした。「小田原宿と」「松原大明神」は古くから固い縁で結ばれきたようです。由緒によれば、「松原大明神」は久安年間（1145-1150）に勧請されたこと、最初は相模国足柄下郡山王原村松原にあったとの説が示されています。つまり「松原大明神」は山王原村から現在の松原神社の地に移った可能性があります。それを信じることにします。

【山王原村】
『新編相模風土記稿』によれば、山王原村は古くは原方村と呼ばれたが、のちに村の鎮守である山王社にちなんで山王原村としたとあります。山王社が1200年頃に存在していたか不明ですが、松原明神は松原の中にすでに存在していた可能性はあります。また、山王原村の3つの小名のうち2つは「上宿」・「中宿」でした。この事実はかって山王原村に“宿”があったことを裏付けている可能性があります。　過日、法務局に行き、明治22年以降の土地台帳で山王原地区の小字調査をしましたが、小字「上宿」・「中宿」はすでに歴史の中に消え去っていました。

【小名の全調査】
『新編相模風土記稿』の中の足柄上郡・足柄下郡のすべての村々の小名を調べたところ、歴史の中で「宿場」があった村々には必ず「宿」のつく小名が存在していました。
すなわち、古来から「酒匂宿」があった酒匂村には「中宿」が、「坂本宿」があった関本村には「上宿」・「中宿」・「下宿」が、「国府津宿」と関連する前川村には「中宿」が、「箱根温泉宿」があった湯本村には「下宿」・「中宿」が、そして「小田原宿」には「中宿町」がありました。つまり街道筋に旅人を泊める「宿場」が成立した地には、後年「宿」のつく小名が存在するようになるとの仮説が成り立ちます。すなわち江戸時代の山王原村の小名「中宿」・「下宿」の存在は、ずっと古い時代に、この地に「宿場」（仮称“をたわら宿”）があったかもしれないとの推理が成り立ちます。
（注：久野村にも小名「中宿」・「下宿」がありますが、その理由はわかりません）。

【仮説：“をたわら宿”から「小田原宿」へ】
“をたわら宿”は、1200年前後に山王原村の地にあったと思われます。鎌倉時代後期の初期の「小田原宿」の規模は7～8件と推定されていますから、“をたわら宿”は数軒程度の小さな“宿場”であったでしょう。その“をたわら宿”は歴史の事実として、西におよそ3kmほど移動し、「小田原宿」の地に移っていったことになります。　なぜ移動したのか、どのような筋書きが考えられるのだろうか。

# 結　考えられるストーリー

今から800年ほど前、鎌倉時代の初期のころです。まだまだまばらに人家がある程度の地であったのでしょう。人々がどのようにその地を呼んでいたかわからないので、江戸時代に知られている地名を使うことにします。

古来から酒匂川の河口近くの左岸には「酒匂宿」があり、酒匂川を渡った右岸には箱根山に向かう海辺の「箱根道」（古東海道）がつづいていました。鎌倉幕府主導の「二所参詣」が盛んになるにつれ、往来する人たちが増えてきて、雨が降ったら渡れなくなる酒匂川の対岸にも「宿」ができるようになるのは自然の成り行きだったでしょう。のちに山王原村と呼ばれるようになるその一帯も“をたわら”と呼ばれていたかもしれません。松原明神はその“をたわら宿”のそばの海岸近くの松原の中にあったのでしょう。その松原大明神、そして“をたわら宿”はなぜ移動したのでしょうか。

・可能性の一つは鎌倉時代に頻繁にこの地を襲った大地震（下記参照）です。『新編相模風土記稿』によれば、村の鎮守であった山王社は江戸時代の慶長年間に巨波（1605年の慶長地震）で壊れ、移されたとあります。浜辺の松原にあった松原明神社も同じように、それ以前の鎌倉時代にこの地を襲った大地震で壊滅し、安全な地に移転した可能性があります。その時に壊滅した“をたわら宿”も、松原明神社と共に移転した可能性も、またあり得る話です。

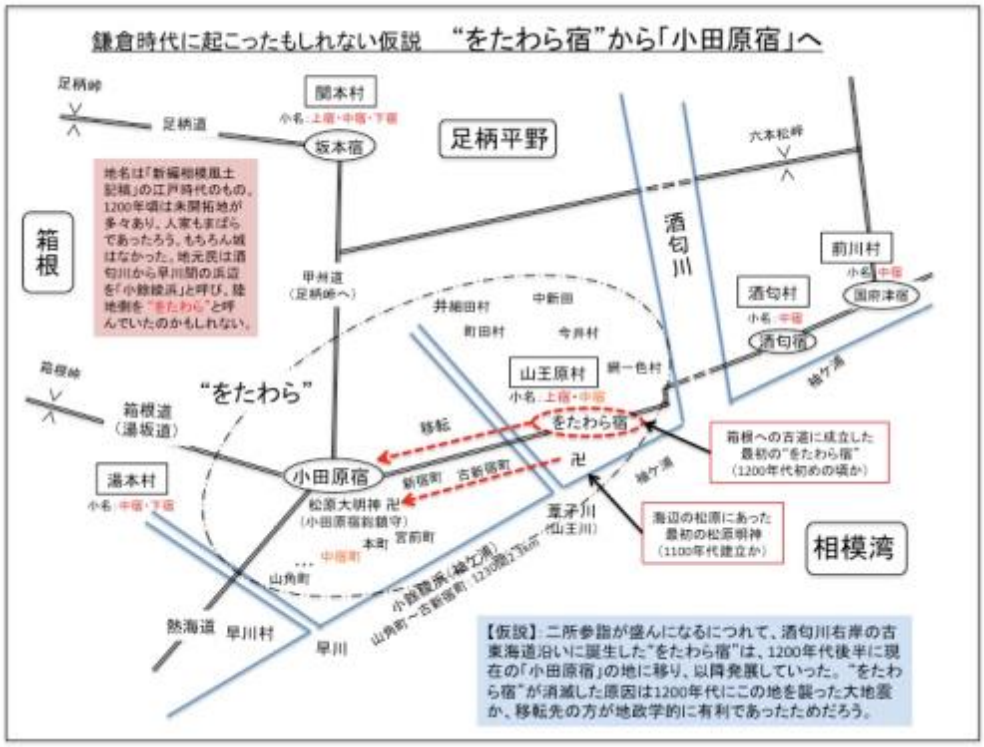
- ・1096年12月11日：「永長地震」・M8-8.5・死者1万人以上
- ・1220年01月12日：「鎌倉地震」
- ・1227年03月07日：「鎌倉大地震」
- ・1240年02月22日：「鎌倉地震」
- ・1241年05月15日：鎌倉で大地震　・M7・津波
- ・1257年10月02日：「正嘉地震」・M7-7.5
- ・1293年05月20日：「永仁の大地震」・M8クラスの巨大地震
- ・1323年05月03日：「鎌倉大地震」
- ・1331年08月11日：「元弘地震」：

広重「東海道五十三次　小田原（狂歌入東海道）」国会図書館デジタルコレクション

松並木の向こうに地引き網漁が描かれている。旅人は酒匂川対岸の網一色村に渡り、川沿いの東海道を南に向かい、すぐに海沿いに曲がって箱根に向かった。鎌倉時代初期の古東海道もこのように人家もほとんど見られない海辺の風景の中を箱根に向かっていたのであったろう。“をたわら宿”はすぐ近くにある。

・他の一つの可能性は、「小田原宿」の地が地政学的に有利であったことでしょう。「足柄道」に代わり主要道となってきた「箱根道」と、足柄峠に向かうのちの「甲州道」、そして伊豆山権現に向かう「熱海道」という鎌倉時代の3つの主要道の分岐にあたります。

この条件は、当時、この地の覇権を握っていた中村党の小早川一族にとっても、また地元民や旅人にとっても、山王原村の地よりも好ましい要因があったと思います。市庭ができ、商いをする仮屋が立ち、人が集まり、集落が大きくなっていき、宿泊する旅人も増えていくという好ましい条件です。そのために“をたわら宿”よりも新たな「小田原宿」の方が繁栄し、“をたわら宿”は自然に衰退していったとの筋書きも、またあり得る話です。

以上のような仮説に基づけば、『曽我物語』や『仏牙舎利記』に出てくる「小田原」は 初期の“をたわら宿”のことであり、『春の深山路』、『十六夜日記』、『宴曲集』、『遺塵和歌集』などに「小田原」が現れない理由は、1200年代後半に“をたわら宿”が消滅あるいは衰退した時期となります。そして1300年以降に「小田原」が頻繁に現れるようになるのは新たな場所に「小田原宿」が誕生し、発展してきたことによる、との説明もまた可能になります。

【終わりに】 上述した妄想は史実に反しているのかもしれません。またすでに大先輩が唱えている話なのかもしれません。とは言え、わずかな情報を元に推理していく歴史の楽しみ方を体験することができ、よかったと思います。